いしかわの遺跡

No. 38
2011.7.25

金沢城下町
武家屋敷の発掘調査

金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）の空中写真

金沢城跡の北東を画する白鳥堀に隣接する金沢城下町遺跡で、金沢地方・家庭・簡易裁判所敷地内に位置します。

平成22年度の調査では、江戸時代前期以降の礎石建物や掘立柱建物に加えて、石組の池や水路、井戸、石敷、土坑など多くの遺構を確認し、園池の景石と考えられる石材も出土しました。

江戸時代の城下町絵図では、加賀藩の公事場や有力武士の名前が描かれていることから、調査区の大部分は、武家の屋敷とそれに付随した庭園であったと考えられます。

池の発掘状況

財団法人　石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1　TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731

E-mail●mail@ishikawa-maibun.or.jp　ホームページ●http://www.ishikawa-maibun.or.jp/

H22 発掘調査

北安田南遺跡〔白山市〕

白山市北安田町地内に位置し、北陸新幹線の建設工事に伴う発掘調査では、成町遺跡と高見遺跡との中間に所在します。平成21年度から2ヵ年にわたって発掘を実施した結果、弥生時代後期から古墳時代前期、奈良・平安時代、鎌倉時代といった三つの時代のムラがみつかり、手取川扇状地における開発の様子がわかってきました。

弥生時代後期から古墳時代前期では、竪穴建物6棟、掘立柱建物2棟などがみつかりました。最も大きな竪穴建物は、五角形に地面を掘りくぼめた範囲が直径8m近くもあり、床は土間として踏みしめられたものらしく、非常に固くなっていました。

奈良・平安時代では、掘立柱建物2棟のほか、水路と、耕作に関係するとみられる細溝群がみつかりました。水路はムラが立地する高まりのうちでも、標高が高い部分に通され、細溝群とともに、ほぼ同じ位置で2回程度つくり変えられています。これらの遺構は、当時の住居とそれに付随した耕作地であったことが考えられます。

鎌倉時代では、小規模な掘立柱建物3棟がみつかりました。調査区内に点在している様子から、中世の扇状地で進められた再開発との関わりが注目されます。

三つの時代いずれも、建物が同じ場所で建替えられた例が少ないことから、各ムラの営みは、比較的短いものとみられます。

東上空からみた調査地

古墳時代の竪穴建物

奈良・平安時代の水路と耕作地

鎌倉時代の掘立柱建物

道村（どうむら）B遺跡〔白山市〕

白山市宮丸（みやまる）町に位置する集落遺跡で、近くには中村ゴウデン遺跡（弥生時代～中世）や米永（よねなが）シロシキ遺跡（平安時代）など多くの遺跡が分布します。北陸新幹線の建設工事に伴う発掘調査で、古墳時代末頃から平安時代のムラが、川を挟んで展開した様子が確認されました。ムラの西側は高く安定した場所ですが、東側は川の氾濫（はんらん）を受けやすく、2度も泥に埋もれた様子が確認されました。このため、竪穴建物（たてあなたてもの）と掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）からなるムラは、そのたびに作りなおされています。

遺跡の空中写真（南方から）

奈良時代の竪穴建物には、造りつけのカマドと厚い灰層の堆積がみられます。周囲からは炊事などに使用された土器群が出土しました。

おもな出土品には、土師器（はじき）や須恵器（すえき）などの日常食器と容器、耳環（じかん）や馬具（ばぐ）などの金属製品があり、皇朝十二銭（こうちょうじゅうにせん）のうちの和同開珎（わどうかいちん）と神功開宝（じんごうかいほう）も出土しています。

竪穴建物と掘立柱建物の複合状況

平安時代の掘立柱建物

奈良時代のカマドと土器群

和同開珎の出土

七尾城跡〔七尾市〕

七尾城は戦国大名の能登畠山氏が、16世紀の前半に構築した日本有数の規模をもつ山城です。難攻不落とも言われた山上の要害に加えて山麓に広大な城下町をもち、能登の政治・文化の拠点として発展をとげました。こうした七尾城も天正５年（1577）の上杉謙信の攻略で落城し、天正９年（1581）には織田信長から能登を与えられた前田利家の支配となりました。

七尾城跡の調査は、平成22年度で６年目となります。平成17～19年度の調査では、木落川と庄津川に挟まれた城下町の中央部を発掘し、城下の防御線となる総構の堀、本丸へ向かう大手道と屋敷地、鍛冶や染物などの職人居住を裏付ける町屋の遺構を確認しました。また平成20・21年度は、庄津川の西側で掘立柱建物や石組井戸を発掘し、城下町の広がりを確認することができました。

平成22年度は平成19年度に確認した大手道を挟んで、東西２箇所の調査区（Ｐ10・Ｐ11）を発掘しました。西側のＰ10調査区では、平行する２列の石垣で区画された幅12ｍ規模の屋敷地を確認し、大型の竪穴状遺構や石組井戸などの生活関連遺構を発掘しました。竪穴状遺構は7×３ｍ、深さ0.8ｍで、埋め立てられた内部からは、完形の土師器皿が多く出土しました。東側のＰ11調査区では、径1～2ｍの土坑や石組井戸を検出しました。また、両調査区からは、16世紀代を中心とした土師器皿、中国製磁器の碗や皿、瀬戸・美濃焼の茶碗、越前焼の甕や擂鉢のほか、文房具の硯、茶道具の石臼など、戦国時代の生活用具が多数出土しました。

今回の調査では、戦国時代の城下町を通過していた大手道の両側で営まれていた屋敷地の配置と内部の構造を具体的に知る上で、貴重な成果をあげることができました。

石垣で区画された屋敷地（Ｐ10調査区）

遺構の検出状況（Ｐ11調査区）

竪穴状遺構の発掘状況（Ｐ10調査区）

竪穴状遺構から出土した土師器皿

情報発信

平成 22 年度 講座 考古学最前線「木簡から探る平城京と北陸道」

最新の考古学研究を解説する講座考古学最前線は、平成 22 年 11 月 20 日に「木簡から探る平城京と北陸道」と題して、奈良女子大学の舘野和己教授にご講演いただきました。

舘野先生は、はじめに、平城京遷都された 710 年、都城の中心に位置した大極殿は、建設の途中であった史実を紹介し、古代の木簡から平城京と北陸道の関係を詳しく説明されました。会場の県立美術館ホールに集合された 115 人の方々は、平城京の二条大路や長屋王家の出土木簡の解説から、都の暮らしや市の風景が連想されたようで、うなずきながら、メモを取る光景がみられました。

講演の後半は、北陸道から運ばれた進物の海産物や米、庄園遺跡の解説から「加賀郡牓示札」の評価へと進み、木簡から探る古代史研究の重要性を話されました。

平成 22 年度 発掘報告会「いしかわを掘る」

県内の発掘調査を担当した調査員が、その成果を紹介する「いしかわを掘る」は、本年3月 13 日 (日) に県立美術館ホールを会場として、６件の調査報告を行いました。

報告は、弥生～古墳時代の集落を発掘した金沢市出雲じいさまだ遺跡の成果から始まり、北陸新幹線の建設に伴う白山市北安田南遺跡や道村Ｂ遺跡では、発掘された古代の住居群とムラの様子が紹介されました。中世や近世の調査としては、七尾城跡の戦国時代の屋敷や、金沢城跡の玉泉院丸庭園が報告されました。玉泉院丸庭園では庭園の絵図にくわえて、石組みの導水路の画像がスクリーンに映されると、参加された 130 名の方々は、その解説に注目し、画像に見入っていました。

古代体験

ゴールデンウィーク「手形・足形づくり」

平成 23 年のゴールデンウィーク（4/29 ～ 5/8）中に開催した「手形・足形づくり」は、未就学児を対象とした随時体験のメニューです。こどもの日を中心に約700 人の子供たちの「手形・足形」が出来上がりました。

会場の体験工房では、保護者の方が粘土のかたまりを叩いて延ばし、子供の手形・足形をとる光景が毎日見られました。軟らかい子供の手足を粘土に押しあてるのは意外に難しく、保護者の方は苦労しながら形をつけていました。

手形・足形付土版
（青森県大石平（1）遺跡出土）

これは縄文時代の出土品「手形・足形付土版」がモデルで、その出土品は北海道や東北地方などの縄文遺跡で見つかっています。乳幼児の手や足を粘土板に押しあて、焼き上げた土製品で、紐を通すためと思われる小穴があります。性格は、まじない用のお守りとして、身に付けたり掲示したものと推定されています。青森県大石平（1）遺跡出土の土版は、全長約7cmの手形と足形で、乳児のものと報告されています。

期間中、子供の記念品となる作品を製作されている方々からは、子供へのあたたかい「想い」が感じられ、ほほえましい「手形・足形」が多数完成しました。

保護者の方も思わず力が入ります。

姉妹で仲良く製作体験。

手足の形をつけた後は、縄文時代の道具である
縄・貝・竹などを使って文様をつけました。

焼いたあと、本館に展示した約 700 点の作品。
多数のご参加、ありがとうございました。

収蔵品ギャラリー

石川県埋蔵文化財センターが保管している出土品の中から、選りすぐりの収蔵品をご紹介します。今回は金沢平野の出土文字資料を紹介します。

収蔵品No. 24　出挙木簡（すいこもっかん） －金沢市畝田（うねだ）・寺中（じちゅう）遺跡－

出挙とは、古代に行われた稲の貸し付け制度で、「出」は貸与（たいよ）、「挙」は回収を意味します。この制度は、国や郡役所が春に稲を農民に貸し付け、秋の収穫期に五割の利息（りそく）をつけて返済させるもので、国や郡の財政（ざいせい）を支える重要な収入でした。

畝田・寺中遺跡から出土した出挙木簡は、奈良時代の中頃に越前国加賀郡（えちぜんこくかがぐん）の役人が、畝田郷（うねだごう）で行った出挙の返納を確認するために用いたものです。

木簡は横長の長方形で、スギを用いています。縦 10.3 cm、横 29.2 cm、厚さ 0.9 cmで、下半が欠け、二つに折れています。表面には 13 行の文字が書かれており、裏面には馬の絵が描かれています。

表面の1行目には「天平勝宝（てんぴょうしょうほう）四年」と年号が書かれており、この木簡が使われた年が西暦 752 年であることがわかります。２行目からは、稲を貸し付けた 11 人の名前と稲束数が列記されています。初めに「戸主阿刀足人」と見えることから、この木簡には「阿刀足人」を戸主（こしゅ）とする「戸（こ）」（地方行政組織の最小単位）の構成員が記されていることがわかります。

人名は前半部に7人書かれており、「合稲二百卅（にひゃくさんじゅう）」と合計束数が記されていますが、後半部に書かれた4人は合計がないことから、返納済の人とそうでない人を書き分けたものと思われます。返納の確認は、「戸」の構成員ひとりひとりについて、確実になされていたことがわかります。

訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

国指定史跡　秋常山古墳群

秋常山古墳群は、手取川下流南岸に広がる能美古墳群の一角を占めます。1号墳は全長約 140 mの北陸最大級の前方後円墳で、4世紀の末に築かれました。2号墳は、5世紀中ごろに築かれた一辺が約 30 m の方墳で、能美古墳群で唯一、埴輪を伴います。

1号墳は、全長に対して前方部が短いことが特徴です。高さは 19 mで三段に築かれ、墳丘の斜面には二段の平坦面がめぐります。このうちの上段と中段の斜面に葺石がみられます。

2号墳は、1号墳と裾を接する位置にあり、高さは東側で 5.4 m程度とみられます。埋葬施設は木棺を粘土で覆って保護したものです。埋葬された人物の頭部付近には臼玉が約 1,850 個、竪櫛 10 枚、刀子（小刀）2本、針1組が、また足元には2本の鉄刀が副葬されていました。

平成 16 年度から保存と古墳学習の場として活用を図るため、史跡整備が進められ、平成 22 年度に完成、平成 23 年 5 月 13 日に史跡公園として一般公開されました。

秋常山 1・2 号墳（手前が 1 号墳）

2 号墳（整備完了後）

所　在　地：能美市秋常町
交　　通：JR 寺井駅から車で 10 分
　　JR 小松駅から車で 15 分
問　合　せ：能美市立歴史民俗資料館
　　電話　0761－58－6103

（写真提供　能美市教育委員会）